The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2度の自然観察会に参加して
Author(s)	川上, 展代
Citation	臨床哲学のメチエ. 2007, 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3775
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

なくてはならない根源にあるものを自覚させる一助になると思う。

第２回目は 2006/07/11 に同じく万博自然公園にて行われました。今回は一般の参加者も含めて後半に哲学カフェを行い自然観察についてそれぞれの考えを深められたものと思います。少し雨が降ってきて、その中での自然観察は天気の良い時とは違った自然観察ができました。木々の手触り、自然に聞こえる音、林の中に入っていくと、なんでもない隅っこにしゃがもうとすると蜘蛛の糸が張られていて、顔にひっかかったりする、はっとして、こんなところにも生の営みがあるということを発見したとき、人間も他の動植物もこの一瞬の生を共有しているという感覚に捉われ感動しました。一体化ということについて考えさせられたものです。場所は前回と同じではありますが、コースが違ったので感覚的にも異なったものがあったように思います。また、雨の中でのカフェとなり、それなりに集中できたのではないでしょうか。同じ体験をしたもの同志が対話をするということは、この自然観察を行う上で自然についてそれぞれの認識、考えを深める、そして自然観察会自体の考察を深めるためにも重要な行事であることに気づきました。

２度の自然観察会に参加して

川上　展代

世間で行われている自然観察会や哲学カフェのそれぞれについてすらほとんど予備知識も経験も持っていないのに、自然観察会と哲学カフェを合わせることで環境について考えるというアプローチを模索する班に入ってしまった。最初は不安に思いながらも、逆に先入観を持っていないことを強みにしてとにかくやってみようと切り替えて、この一年を過ごした。そして、同じ場所で行われた二度の自然観察会に参加することで、私は参加者側と主催者側の双方を経験することができた。

初回の自然観察会は、プログラムを考える事前の分科会に何度も出席しながらも、完全に“お客さん”の気分で参加した。自然園のようなところに入るのは久しぶりだし、ゆっくりと緑の中を歩き回ること自体もかなり久々で、それだけで「自然」を満喫した気分になった。樹木の名前、土の中や水の中の生き物といった新しい知識も身につけられたが、音を絵にして、それを他の参加者と一緒に発表しあうというプログラムが最も印象的だった。立ち止まって耳を澄ますこと、それを線や点で表現して他の人と話すことで、自分の「気づく感覚」について考えることがで

きた。そして、最後に行われた哲学カフェでは、同じ一日を過ごした人たちから出てくる意見の違いや、目の向け方の違いに驚いた。その違いはどこからくるのか、自然観察会はどこまで「作る」ことができるのか、そもそも「作って」よいのか、という疑問が出た。二度目は、そのような視点を持ちながら、主催者の立場を考えながら参加した。哲学カフェのタイミング、それまでの観察会の進行や内容などについて事前に検討を重ねた。当日の参加の仕方は初回と同じく“お客さん”だったが、他の人がどのように見ているか、どのように言葉にしているかについて注意しながら一日を過ごした。この時もやはり他の人の感覚や目のつけどころに刺激を受けつつ、内容や内容の方向性について議論を重ねることが大事であること、また、観察会中の会話について気を配ることがカフェの充実に繋がっていくのではないかということを感じた。

イベントとしての観察会の運営と、カフェの進行。目的を明確にしながら二つの要素を織り交ぜてうまく一つにまとめていくためにも、二度にわたって自然観察会を開催してみたことは大きな前進だったと思う。やってみる、考える、またやってみる、手探りすぎて進んでいるように見えなくても、意味がないように見えても、それが一番近道ではないかと思う。

自然との別の関係を探して

紀平　知樹

1　万博記念公園と自然観察

環境班では、７月９日に万博記念公園の自然学習の森を利用して自然観察会を行った。観察会当日は、薄曇りではあったが、しかし気温はかなり高く、蒸し暑さとたたかいながらの観察会ということになった。午後１時にモノレールの万博記念公園駅に集合し、午後４時頃までに自然学習の森を一周して、その後１時間ほど、自然観察会の体験をもとに参加者で議論を行った。

自然学習の森は、万博記念公園の西南の一角を占めており、その名の通り自然を学習できるような工夫がなされている。例えば、主要な樹木には名前の札がつけてあるが、その名前がすぐにはわからないように名前は隠されており、その植物がどのよう植物かを示唆するようなヒントが書かれている。それで、その森を歩きながら植物の名前をクイズ形式で覚えていくことができる。またソラード（森の空中観察路）という施設があり、それに昇れば、地上から樹木を見上げながら歩くのではなく、むしろ樹木を上から眺めながら歩くことができるようになっている[1]。

集まったメンバーは、誰もそれほど植物に詳しいわけではなく（わたしも昨年、あるNGO団体の主催する自然観察指導員の講